¡Hola amigos!

R と N の Málaga からの手紙

（０４７号）

皆さんこんにちは。

このページは、私達のスペインでの日々の暮らしを友人・知人の皆さんに知って頂こうと思って開きました。　ですからごく私的なもので、読者のかたも大なり小なり私達をご存知だという想定で作成しています。そのつもりでご覧下さい。

各項の更新は不定期ですが、なるべく毎週末迄に何らかの更新をするつもりです。

更新日を確認の上各項目を選択してください。

２００４年０６月０３日　　Ｒ　＆　Ｎ

目次	更新日
身辺雑記	２００４年０６月０３日
Ｂａｒ　ＲｙＮ	２００４年０６月０３日
買い物百般	２００４年０６月０３日
エクスカーション	２００４年０６月０３日

ご注意　：　各項目のファイルは更新日から一ヶ月を経過したら削除します。

悪しからず。

＊身辺雑記＊

＊＊

「タルヘタ・ドラーダ」の巻　２００４年６月３日　更新

日本ではシルバー・シートとか、シルバー・ボランティアとか、高齢者をさすのにシルバー、銀を使いますね。高齢者＝白髪・銀髪＝シルバーという連想でしょうか。

タルヘタ・ドラーダ tarjeta dorada は「金のカード」の意味で鉄道の高齢者割引カードです。スペインにだって銀髪・白髪の人はいますが、パーセンテージとしては圧倒的に禿げちゃう人のほうが多い。そんなに高齢でもないのに天辺だけツルツル・ピカピカという人はかなりいます。だからゴールドか？　まさかね。バー様がツルツルであるわけないし・・・。

スペインでは国鉄を初め、パラドールや美術館など国が運営している施設では６０歳以上は三割引きという事は知っていました。けれども今までタルヘタ・ドラーダを持たなかったのは、コレで電車に乗るためには券売機でなく出札窓口で切符を買わなければならない、そうなると延々長蛇の列を辛抱強く待たなければならない。一方私達が電車で良く行くフエンヒローラは二人分往復買うと２．９ユーロです。Ｒがドラーダを使うとなると、Ｎは券売機で１．４５Ｅ、Ｒは長い列に並んで１．０２Ｅ、アホラシ、と思ってしまうのが今日迄ついにお金が貯まらなかった一番の理由です。

もっと大きな割引になる国営ホテル・パラドールやスペイン版新幹線ＡＶＥなどは当分利用する予定はないし、コレまで横目で睨んでいたのです。しかし、スキン・ヘッドなんだから年令でも、ツル・ピカの点でも充分ドラーダの有資格者です。

もう一つのタルヘタ、居住許可証ももらえたし、これでカーディスへ行くとなると鉄道ももっと長距離を使う可能性が多くなります。それじゃあ、この辺でそろそろ高齢者の仲間入りをさせてもらおうか、１０ユーロ以上の切符を買えば常用ビーノまるまる一本タダになる勘定がまず先にきます。

タルヘタ・ドラーダは居住許可のタルヘタのコピーを持って鉄道の出札口に行くと、その場ですぐ簡単に発行してくれました。有効期間一年、３ユーロ。

（注：その後、近郊線の自販機でも割引券を買えることを知りました。事実誤認。）

これがスペイン国鉄発行のタルヘタ・ドラーダ。金の御札。これでＲもツル・ピカの仲間入り。表には姓名、身分証明書番号（Ｒの場合は居住許可証番号）、そして有効期限が書いてありますが、裏の発行日からカッキリ暦日一年。

何でも、一年間有効という場合、それが当たり前ですよね。ところが居住許可証はそうじゃないことは前にお話しましたね。最初の一年のも九日前、今度の二年有効のもやはり暦日二年に九日足りません。何故そうなのか、依然謎のままですが、同じオカミでも内務省と国鉄は考えが違うらしい。まあ、とにかくスッキリ暦日一年で良かった、ヨカッタ。内務省よりはポッポヤさんの方が分かりやすい。

私達は窓口が混んでいる時間帯を避け、更に電車が出たすぐあとでほとんど出札口付近には人がいない時を見計らって窓口に行きました。この線は単線で、この駅で電車がすれ違うので上りも下りも同時発車です。

窓口には乗客は誰もいませんでした。居住許可書の写しを差し出してドラーダの発行を頼むと、出札係のオジはヤオラ天眼鏡を持ち出して記載内容を調べている様子。

確かに活字は小さくて読みにくくはありますが、老眼Ｒでさえ眼鏡さえあればそう苦労するほどの小ささではありません。このオジ、日常、活字を読むことなんかないんじゃないのかと思いましたネー。ここでは新聞配達はなくて、新聞とは読みたい人間だけが毎朝買いに行くもの、なんです。だから当然新聞を読む庶民は日本などに較べれば格段に少ないはず。こりゃ、手間くいそうだなあー、と思っていると後ろに切符を買うオバさんが来たので脇へ寄って窓口をあけました。オバさんはグラシアスと前へ進んでドコソコ一枚。ところがオジは冷たく、前の人が終わるまで待て！

これは行列のある所では良く経験するところで、或る人の順番が来るともうナニが何でもその人に権利アリ、みたいな感じです。延々と質問すれば延々と説明します。確かに掲示板のたぐいは極端に少なくて、わからないことは誰かに聞くしかないのも事実です。しかし、だからすぐ行列は長くナガークなってしまうんです。

そして、結局、出来上がったドラーダの姓名欄のＵの字はＩＪと綴られていました！どうせ訳のワカラン東洋人の名前なんか誰も良く見ないし、まあ、イイカ。

上の写真がドラーダで乗ろうという電車です。この電車見覚えありませんか？

そうです、あのオーンセ・デ・マルソ、３月１１日のテロでやられたのと同じ車両です。この塗り色は各都市の近郊電車で、この色の電車で、例えばカーディスへ行く事はない、ハズです。だから実際はこの電車に乗るためにドラーダを使うことは少ないでしょう。さっき言ったように４０銭のために長蛇の列に並んで買うのはどうも・・・。それも月に一回か二回だし・・・。だからドラーダの出番はカーディスへ行くとかセビージャに行くとかいうときですが、割引になるのはＲだけですから、二人分合計では結局バスの方が安いという事になりそうです。割引になる方は電車で、一人はバスで、というのはいかにも馬鹿げてますね。この金券まだ使ったことないんです。

ところで、突然ですが、電車の駅にはトイレがあるのは当たり前ですよね。それがどうもこの国ではそうでもないんです。このマラガ近郊線には１９の駅がありますがトイレのあるのは五つだけ。それもホームの端にぽつんと男女夫々一つか二つずつしかありません。

日本でコレだったらまず問題にされずには済まんでしょう。そのためだけに「用」もないのに駅やデパートに「用」に行くという事もよくあることですからね。

そんなに少ないのにホームのトイレはいつもほとんど無人。滅多に人が来ないので、自動消灯になっている内部はいつも真っ暗でスゥィッチを探すのに往生します。勿論車内にもトイレはありません。なぜ、そんな風なのか、スペインの人はみんな「遠い」のか。ンなこたーあるわきゃないわナー。

その答えはバルです。何処の町にも村にも無数に、と言っていい位あるバルのお蔭でスペイン国鉄は経費を大幅に節減できているんです。

バルには必ずトイレがあって入れたものは出していく仕掛けになっていますが、それだけでなく、誰でも外から断りもなくスイッと入って出してもいい事になっているようです。テラスでなく店の中で呑んでいると、外からヌーッと入ってきて、暫くするとまたスーッと出てゆく人がありますが、その人が果たして外のテラスで呑んでいた人なのかどうか疑問です。明らかにそうではない、と言い切れる状態はテラス席のない場合です。コレが何気なくできるようになればたいしたもんだと思いますが、とてもまだ、修行が足りません。つい、カーニャ一杯でも呑まないと、とハバカリます。

ボーダ・レアルでの土砂降りを最後に天気は漸く夏型になりつつあります。三月にはそれ以後が信じられないようなイイ陽気のときがありましたが、それはほんのいっとき、慌てて引っ張り出した短パン・サンダルもそのままになっていました。

四月・五月はイイ時悪い時が交互にあって、おまけに悪い時の悪さがイイ時の良さより勝っていたので全体の印象としては、今年の春は天気が悪い、というとこに落ち着きます。でも、それもどうやらオワリ。

今週明けから急に暑くなって、アンダルシアのフライパンと言われるセビージャでは早くも電光掲示に４３度なんていう数字がが出ているのをテレビで見ました。

ここでも日中の外気温は３４度。そんな時も部屋の中は穴あきレンガの壁と人造大理石フロアーのおかげでヒンヤリ、２６度。アンダルシアの家のつくりはトニカク夏の暑さを凌ぐ、という一点に神経を使っているようです。南面３室なんていう住宅のキャッチ・フレーズはとんでもないことで、折角の南に面する壁は窓ナシという建物は珍しくありません。いい天気の日中、シャッターを締め切って部屋の中を暗くしているのもごく普通に見かける光景です。外国人は別。勿論ウチは夜も昼も開けっ放し。

窓下のハカランダはご覧の通りの七分咲き。イヨイヨ短パン・サンダルの出番です。

早くカーディスへ行ってドラーダで浮いたタダのビーノを呑まなきゃ・・・。＊＊＊

＊＊＊

＊Ｂａｒ　ＲｙＮ＊

「或る日のコミーダ・その四」の巻　２００４年６月３日　更新

（ベルデュラス・コシーダス　**verduras cocidas**）

ベルデュラスは野菜、コシーダスは「煮た」という形容詞、要するに、まあ、「おでん」と思ってください。スペインに「おでん」なんて、あるわけありませんから、当然これは勝手に作った和製スペイン語です。

コミーダ comida＝昼食 担当者としては、とにかく余りややこしい手間は掛けたくない、しかし、うまいコミーダにしたい。哲学的でない二律背反です。

哲学的ではないがゆえに、案外この命題は簡単に解決できるときがあります。今日のメニューなどは、男子厨房にいりてもナントカなる、の代表格。少々煮くずれようが味が薄かろうが、濃かろうが、売りモンじゃないんだから、文句は言わせません。

プロの「おでん」は何年間使っているダシだとか、色々ウルサイことを言い出せばキリがないようですが、そこはそれ早いが一番の簡単料理、一回こっきりの作りきり、食べきりですから、年季の入った煮汁なんぞとても出来ない相談です。

強い味方は、このあいだ「買物」で紹介したスペイン産調味料の数々。嬉しい事にその後また一種類新発売でトータル五種類。即ちポヨ（鶏ダシ）、アホ・ペレヒル（ニンニク・パセリ）、イエブラス（各種香草）、セボーヤ・アホ（玉葱・ニンニク）、それに今度出たベルデュラス（各種野菜）。残念ながらこのシリーズでは「魚のスープ」というのがありませんが、それはまた別のメーカーの同じような調味料シリーズにチャンとあって使う気になれば使えます。でも「スペインおでん」は上記五種類の調味料マゼコゼと酒・醤油少々で充分、これがインスタントスープか！ と驚きの複雑な味になります。もう一つの大きな味方は素材の野菜がどれをとっても美味しい事。魚の味がもうほとんど絶望的な中で肉類と並んで野菜の旨さには感心しています。

なにしろ、写真だけですから、なんと言おうと言いたい放題、手前味噌でも、自画自賛でも自由自在です。まあ、でも、そんなに不味いモンじゃありません。ホント。

今日の素材は時計回りに、ソーセージ半分（サルチーチャ salchicha）、玉葱（セボーヤ cebolla）、コリアンダー（シラントロ cilantro）、ズッキーニ（カラバーシン calabacin）リーキ（アホ・プエロ ajo puerro）、じゃがいも（パタータ patata）、塊ベーコン（バコン bacon）、生姜（ヘンヒブレ jengibre）、セロリ（アピオ apio）、そして最後は真中のニンジン（サナオーリァ zanahoria）、以上やや少なめの１０点。　プラス、アセイツナス、アホ、マスタード、セルベサで目に見えるだけで１４品目。マズマズでしょう？

ソーセージは普通、野菜を切っている間、塊ベーコンと一緒にカリカリ・こんがりになるまで低温でジックリ焼いてから煮ます。そのほうがベーコンのスモークの匂いがしみて美味しいし、余計な動物油を排除できます。この日はツイうっかり忘れて、焼いたのはベーコンだけ。この、ついウッカリが時々出るのが泣き所。

Ｒが気をつけているのは、味を濃くしすぎないこと、タダ一点。薄過ぎたときそれをカバーしてくれるのは例のモホ。おでんにはカラシ、コシーダスにはモホでキマリ。

そして、セルベサ。これタダのビールじゃありません。 ラベルに赤字で Sin と書いてありますね、Sin=Non でアルコール抜きのビールです。 呑みたいけど呑めない、呑めないのに呑みたいという人のために何種もの Sin があります。休肝用。

只今当バルは三日に一度休業です。呑む、呑む、呑まない。呑む、呑む、呑まない、の桂馬飛び。どうです、立派なモンでしょう？　香車呑みや飛車角呑みも今は昔。

これも常にベスト・コンディションでウマイ酒を呑みたい一心の猿知恵。＊＊＊

＊買い物百般＊

「私設・私書箱」の巻　２００４年６月３日　更新

ここの郵便事情の悪さは何度も繰り返し言ってきましたから、いいかげんミミタコだと思います。いまこうしてＨＰを読んでいる皆さんは、ほとんどの方がＥメールという通信手段をお持ちでしょうし、日本国内では郵便に代わる手段がいくらでも有りますから郵便ぐらいでギャーギャー言うなよ、と思うでしょうが、私達にとってはとかくシャクの種なんです。ン万円分の郵便小包消滅という実害も一度ならずあります。今までに行方不明になってしまった私達宛ての郵便物がどのくらいあるか、Ｅメールでの通信が可能な方からのものだけでもかなりの数になります。外に通信手段のない方からだと、行方不明になったことさえ不明です。なかには数ヶ月たってから配達されたクリスマス・カードや、何故か郵便局からではなく宅配会社から配達された郵便小包などもありました。数ヶ月もの間このクリスマス・カードは何処にあったのでしょう？　また、宅配会社には誰が配達を委託したのか、料金は誰が払ったのか？？

全く不可解です。　先日もこんな事がありました。

七月に予定されている参院選の在外選挙についての説明書が日本大使館から速達で送られてきたのです。ところが、郵便受けに入っていたこの大型封筒の表には「発送人に返送」というスタンプが押され、裏には「住所不正確、通りの名前と番地を明記せよ」というスタンプにご丁寧に署名までしてあります。

日本大使館まで一遍戻ったのかどうか知りませんが、結果としては、とにかく私達の郵便受けに届いていました。宛先の私達の住所は極めて正確、一字のミスもありません。日本のおカミのやる事ですから、そのへんはキッチリしています。一体どうした事でしょう。「住所不正確」で署名をした御仁はここの「通りの名前」「この通りにはこの建物が一軒しかない事」を知らないんでしょうか。一軒だから番地は元々ないのです。あえて書くとすればシン・ヌメロ s/n(sin número)＝無番地とするしかないんです。でも、最終的には郵便受けに届いていたのはどうしてか？　ワカランでしょう？

この間、散歩の途中でこんなものを見つけました。場所は私達のところから３０分位山に入った新興開発地で、山の斜面にどんどん住宅を造っている所です。

これ、なんだと思いますか？　屋根の上の看板を見るまでもなくすぐピンときましたよ。これ、私設私書箱なんです。私書箱を使ったことがある方は、ハハァと思い当たるかも知れません、でも、普通、私書箱というのは郵便局内に有りますね。こんな建設会社の道具小屋みたいな形で、開発中の新興住宅地なんかにはありません。

それに郵便事業はどんな国でも、公営であれ民営であれ、厳しい運営管理がされている筈です。私設私書箱なんてものが果たして営業可能なのか？　営業許可は出るとしても採算が取れるほど需要があるのか？

例えば、日本でこういうものがあったとします、利用申し込みはおそらく「ゼロ」でしょうね。そんな余計な事をしなくたって、日本では郵便は届いて当たり前。宛先が少々怪しい、読みにくい横文字手書きの外国からの手紙でもチャンと届きました。

でも、ここでは商売として充分成り立つくらい利用者はあるのだと思います。

屋根の上の看板にはこんな事が書いてあります。APTDOS は apartados 私書箱の略。即ち英・西二ヶ国語で書いてあるのは、これは貸し私書箱だよ、という事。ウチに帰って、早速サイトを覗いて見ました。サイトは英語版だけでしたし、内容からみてもどう考えてもイギリスの会社だと思います。興味がおありの方はアクセスしてみるとこのＨＰで愚痴ったことが、ある程度ナルホドとご理解いただけると思います。

サイトではあからさまには言っていませんが、要するに、スペインの郵便事情にイイカゲン腹を立てたイギリス人が、少々アテツケ気味に始めた商売ではないかと思います。果たしてこの事業が採算ベースに乗るかどうかは疑問ですが、少なくとも維持は出来ているようです。年間料金税込み１０５ユーロ。簡単に業務内容を説明します。先ず最初に、この事業はスペインの郵便事業に取って代る、または、競合するものではない、とことわっています。洋の東西を問わず、おカミに逆らうのはオリコウではありませんからね。では、どういう事をやるかというと、次の通りです。

利用者は自分宛ての郵便物に自分自身の宛名・宛先と共にこの会社 SPANBOX スパンボックスの私書箱のナンバーを書いてもらうんです。言い換えればこの会社の私書箱宛てに出してもらいます。この会社は、自分が持っている郵便局内の正規の私書箱からこれらの利用者宛ての手紙をピック・アップして、利用者の本来の宛先ごとに振り分けて、コスタ・デル・ソルに何箇所かある私設私書箱(写真)に配達するのです。

利用者は適当な時期に私書箱を開いて着信した郵便を回収すればいいし、発送する郵便物を入れておけば、会社が収集して郵便局で投函もしてくれる、というものです。

ウマイことを考えたモンですね。これなら郵便事業法？に照らしても問題ないはずです。　スパンボックスは自分の私書箱宛てに来た郵便物を回収するわけで、コレ自体は１００％合法ですね。モンクあっか、というわけ。

そのあとが、やや匂わないでもないですが、便利屋と同じと考えれば、特に郵便事業を阻害したとは言えないでしょう。とにかく、こうして現に営業しているのですからセーフ！ であったことは確かです。変わった商売が成り立つモンですね。

郵便だけでなくファックスの送受信も、メールの送受信もスパンボックス経由でやってくれるのです。コレはこの辺一帯に長期休暇でやってくるイギリス人には極めて便利なモノであろうことが、普段郵便事情に泣かされている私達にはスンナリ理解できます。　休暇中もビジネス・メールを欠かせない人にとっては実に価値のあるシステムです。　Ｅメールもファックスもお金さえ掛ければモバイルで何とでもなりますがビジネスでは郵便でしか送れないものも色々あるでしょう。

ところで、大使館からの郵便の事ですが、これを書きながら、ふと気が付いた事がひとつ。「住所不正」とした郵便配達はこの建物の構造を理解していなかったのではないか？　私達の部屋番号は「１－Ｄ」ですがスペインでは普通これは地上階ではなくひとつ上の階、日本式には二階なんです。実際私達の部屋はそうなんですが、傾斜地に建っているためエントランス部分では地上階になっています。速達だったので、配達人はエントランスにある郵便受けでなく直接部屋に届けようと、一つ上の階へ行ってしまった。そして、エッ、こんな部屋ネーじゃねーか。まっ、そんなトコ。＊＊＊

＊エクスカーション＊

「フリヒリアーナ」の巻　２００４年６月３日　更新

Frigiliana です。アンダルシアの白い村として有名なところの一つですが、日本からのパックツアーはもっと便利なミハス Mijas に集中しているようですね。ミハスでは良く日本の観光客グループを見かけますし、そのせいか日本人相手のオミヤゲ屋も何軒かあります。ミハスも決して悪いところではありませんが、これから観光客が押寄せるシーズン中はどうもゾッとしません。折角の鄙びた白い村も人の流れが切れないほど賑わうと、最早「鄙びた」村とは言えなくなります。沢山ある「白い村」はいずれもその歴史をたどるとムーア人の陰がちらつくようで、なんとなく落人部落的色彩が濃いようです。歴史に興味をお持ちの方は例によって図書館へどうぞ。

ミハスは私達の町からはバスで３０分ぐらいで行けますが、このバスが例によって、いつ来るかワカランの代表的シロモノでこれに乗るにはかなりの忍耐を要します。私達も二人だけで、又は人を案内して、ミハスには何回も行きました。一番確かなのは西隣のフエンヒローラまで電車で行って、フエンヒローラ始発のミハス行バスを捕まえる事です。これとてバスが時刻表どおりに出たタメシはありませんが、まあ、とにかく始発駅ですから間違いなくそのうちイツカは出発します。このバス会社の信頼性はその程度。バスを待つ人が、来る方角をギッと睨んでいるのは何時ものこと。

フリヒリアーナはミハスと反対側の東、ウチからは先ず電車でマラガへ行き、そこからは違う会社のバスで約一時間ほど海岸沿いに東進、ヨーロッパのバルコニーで名を売っているネルハという町へ行きます。そこで、バスを乗り換えて今度は内陸へ、山へ登って行きます。ネルハからは２０分位で終着のフリヒリアーナです。

自分で切符を買って自由に電車バスを乗り継いで行くのは、楽しい反面、面倒でもありロス・タイムが常につきまといます。私達は急ぐ必要は全くないので、ロス・タイムがいくらあろうが、一向にかまわないのですが、またもバス・ツアーにしました。そのほうが断然安いというのが最大・無二の理由です。

典型的なアンダルシアの白い村。（腕の所為で写真では旨く色が出ていませんが）青い空、白い壁、緑の葉と赤い花。説明不要だと思いますからとりあえず何枚か・・。こんな山の上の、階段ばかりの土地に、どうして集落が出来たのか不思議です。とても私達のようなヤワな人間では住む事は出来ないと思います。

どこまでもこんな調子です。白い壁、赤茶色の瓦、鉢植えの観葉植物、赤い花。今ではこういうものがウリになっているのだから、綺麗に維持されているのは当たり前ですが、元々のこういうたたずまいが、よそからきた人に強い印象を持たせたから観光地になったわけで、こんな風な村の様子は村人全体の美学であった、のですね。

まだまだ続きます、どこ迄行っても同じです。もうイイカゲン食傷気味ですね。それにしても、人がいないなー、と思いませんか？　実はいるんです。観光地へ遊びにきた解放感からか、ほとんど裸みたいなだらしない格好の外国人はウロウロしています。そういうみっともないのをいれないようなショットはなかなか難しいんです。これらのショットはいずれも階段を又は急坂をかなり登っていった末、行きついた所ですから、ジー・バーが圧倒的に多いツアー客は登ってこれないところ。この村は又モスカテル moscatel という甘口のビーノの産地でもあり、ボデーガも沢山。

バス停のある広場では市を開いていました。ほとんどが観光客相手の商品でした。

最後の一枚。ドウですこのお年より、８０歳台でしょうか、こうして杖を突いて上がったり下りたり、ちょっとした買物に行くんでも容易ではありません。だから丈夫で長生きなんでしょうが、楽ではありません。何故かバー様はみんな黒一色。＊＊＊